

目 次

はしがき

序 章 1

- 第1節 本書の課題 1
 - 第1項 ナショナリズムの現実がつきつけるもの 1
 - 第2項 憲法学を取り巻く現実がつきつけるもの 3
 - 第3項 本書の目的 13
- 第2節 本書の戦略 15
 - 第1項 ナショナリズムの現実を直視する 15
 - 第2項 リベラリズムを擁護する 23
 - 第3項 文化的少数者の権利を憲法から導出する 26

第 I 部 ナショナリズムの憲法学的考察

第 I 章 ナショナリズム、「現実」、「異人」 33

- 第1節 ナショナリズム 33
 - 第1項 「通説」=近代主義的ナショナリズム理解 34
 - 第2項 アントニー・スミスのエスノ象徴主義的ナショナリズム理解 38
 - 第3項 ナショナリズムの標準的な理解 42
 - 第4項 ナショナリズムの規範理論化のための前提 43
 - 第5項 エスニック／シヴィック・ナショナリズム、ポピュリズム 44
- 第2節 「現実」 48
 - 第1項 マックス・ウェーバー 49
 - 第2項 アルフレッド・シュッツ 49

第3項 ピーター・バーガーとトーマス・ルックマン 50

第3節 「異人」 51

第1項 アーネスト・ゲルナーの「外国人」 51

第2項 アルフレッド・シュッツの「異人」 52

第3項 小坂井敏晶の「異人」 53

第4節 小 括 56

第2章 多文化社会における「国民」の憲法学的考察 —— 58 ——リベラル・ナショナリズム論から

第1節 序 58

第2節 問題の所在 62

第3節 憲法における国民観 66

第1項 憲法とエトニーの文化的多様性 66

第2項 二つの国民観 69

第4節 リベラル・ナショナリズム論の端緒と特徴 72

第1項 リベラル対コミュニタリアン論争 72

第2項 「状況解的的自我」観 76

第3項 リベラル・ナショナリズム論の企図 78

第5節 「リベラルなネイション」観 82

第1項 さまざまな「濃度」のネイション観 82

第2項 比較検討 85

第3項 ウイル・キムリッカのネイション観 87

第6節 小 括 92

第3章 リベラル・ナショナリズム憲法学を構想する —— 98

第1節 リベラル・ナショナリズム論を展開する 98

第1項 ウイル・キムリッカのナショナリズム論を補完する 98

第2項 ウイル・キムリッカのリベラリズムの特殊カナダの性格を考慮に入れる 105

第3項 ウイル・キムリッカのリベラル・ナショナリズム論を修正する 106

第2節	リベラル・ナショナリズムとジェラール・ブシャールの間文化主義	108
第3節	「異人」の権利	113
第1項	リベラル・ナショナリズムと「異人」の権利	113
第2項	「他者」と「異人」	114
第3項	「異人」としてのナショナル・マイノリティの権利	116
第4項	「異人」としての外国人の権利	117
第5項	リベラル・ナショナリズム論のこれから	122
第4節	リベラル・ナショナリズム憲法学と競合する憲法学説	122
第1項	「国家と文化」の憲法学	122
第2項	「批判的共和主義」憲法学	125
第3項	「リベラリズム憲法学」	126
第4項	「憲法パトリオティズム」	129
第5項	「トランスナショナル人権法源論」	131
第5節	小 括	134

第Ⅱ部 日本のナショナリズムとリベラリズム

第Ⅰ章	文化問題としての天皇制	137
第1節	序	137
第2節	「日本固有の歴史、伝統」と「国民感情」、「合理」性、国民の「総意」	139
第3節	デイヴィッド・ミラー／ウィル・キムリッカのリベラル・ナショナリズム論	142
第4節	カナダにおける君主制	146
第5節	小 括	149

第2章 憲法教育の「法定」に関する序論的考察 151

——リベラリズムに基づく立憲主義の立場から

- 第1節 序 151
- 第2節 「伝統的な対立軸」と「新しい世代」 154
 - 第1項 斎藤一久の整理 154
 - 第2項 斎藤一久の主張 157
 - 第3項 論点の抽出 158
- 第3節 憲法教育と国家の中立性 159
 - 第1項 憲法学における国家の中立性 160
 - 第2項 基底性ゆえに中立性のあてはまらない領域 162
- 第4節 憲法教育と「個人の自律」 163
 - 第1項 憲法学における「個人の自律」 163
 - 第2項 「個人の自律」のための憲法教育 164
- 第5節 小 括 166

第3章 法教育における人間観 168

——高等学校公民科「現代社会」にみる法教育の要素から

- 第1節 序 168
 - 第1項 本章の目的 168
 - 第2項 本章の構成 169
- 第2節 高校学習指導要領における「現代社会」の特徴 170
 - 第1項 なぜ「現代社会」か 170
 - 第2項 科目全体にかかる「幸福、正義、公正」 172
 - 第3項 中項目における「個人の尊重」の位置づけ 173
- 第3節 法教育の要素 175
 - 第1項 独自性の三要素 175
 - 第2項 基礎的知識の条件 177
 - 第3項 「個人の尊重」と「個人の自律」 181
- 第4節 小 括 183

第4章 高等学校公民科新科目「公共」における主権者教育、 愛国心教育、憲法教育

185

——憲法パトリオティズムとリベラル・ナショナリズム、それぞれの視座から

- 第1節 序 185
- 第2節 学習指導要領改訂の背景——「予測困難な時代」 187
 - 第1項 「知識基盤社会」と「Society5.0」 187
 - 第2項 新学習指導要領公民科における「異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性」の希薄化 189
 - 第3項 「予測困難な時代」に呼び起こされる主権者教育への関心 190
- 第3節 「公共」における主権者教育、愛国心教育、憲法教育 191
 - 第1項 永井憲一と「常時啓発事業のあり方等研究会」 191
 - 第2項 新学習指導要領公民科における「社会参加」の強調と「政治的リテラシー」の希薄化 193
 - 第3項 「公共」における憲法教育——「幸福、正義、公正」の位置づけ 194
- 第4節 公教育における憲法パトリオティズムとリベラル・ナショナリズム 196
 - 第1項 憲法パトリオティズムとリベラル・ナショナリズム 196
 - 第2項 憲法パトリオティズムに基づく主権者教育論とリベラル・ナショナリズムに基づくシティズンシップ教育論 198
 - 第3項 「公共」における主権者教育の在り方 202
- 第5節 小 括 206

第5章 日本のナショナリズムと憲法

210

- 第1節 近代日本のナショナリズム 210
- 第2節 現代日本のナショナリズム 212
- 第3節 天皇制と憲法学 217
 - 第1項 「意味権力」としての象徴天皇 217
 - 第2項 「飛び地」としての天皇制 220
- 第4節 公教育と憲法学 222
 - 第1項 公教育とリベラル・ナショナリズム憲法学 222

第2項 「特別の教科 道徳」	223
第5節 小 括	227

第Ⅲ部 日本の文化的少数者の権利

第1章 多文化社会における憲法学の序論的考察 ————— 235 ——日本・アメリカ・カナダの信教の自由を素材に

第1節 序 235

第2節 多文化主義と憲法学 238

第1項 多文化主義 238

第2項 チャールズ・テイラーの間文化主義 241

第3項 リベラル・ナショナリズム+リベラルな多文化主義=リベラルな文化主義 241

第3節 日本・アメリカ・カナダにおける信教の自由 243

第1項 日本に対するアメリカの影響 243

第2項 日本における信教の自由のあいまいさ 245

第3項 カナダ・アメリカにおける信教の自由 248

第4節 小 括 251

第2章 「新しい人権」と「一般的行為自由」に関する一考察 — 254 ——可謬主義的人間観に基づく日本国憲法13条解釈の可能性

第1節 序 254

第1項 問題の所在 254

第2項 本章の目的 256

第3項 本章の構成 257

第2節 学説の対立 258

第1項 人格的利益説 258

第2項 一般的行為自由説 260

第3項 「一般的行為自由」説 262

第4項	各説の比較検討	264
第3節	可謬主義的人間観に基づく日本国憲法13条解釈	269
第1項	可謬主義的人間観に基づく「人格的利益」説	269
第2項	可謬主義的リベラリズム	273
第3項	「人権」ではない重要な憲法上の権利	274
第4節	小 括	275

第3章 多文化社会における「国籍」の憲法学的考察 —— 278

——リベラル・ナショナリズム論における国籍とは

第1節	序	278
第2節	国籍とアイデンティティとの関係	279
第3節	ネーションについて	280
第1項	ネーションの記述的定義の主観的要素と客観的要素	280
第2項	ネーションの作業仮説	281
第4節	憲法学とネーションの関係	281
第1項	長谷部恭男	282
第2項	樋口陽一	282
第3項	分 析	283
第5節	析出された論点の検討——国民をいかなるネーションとみるべきか	283
第1項	国民をネーションとみるべきか	283
第2項	国民をいかなるネーションとみるべきか	284
第6節	「リベラルなネーション」	285
第1項	リベラル・ナショナリズム論の観点	285
第2項	「ナショナル・アイデンティティ」の共有による統合の構想と「憲法原理」の共有による統合の構想	286
第7節	小 括	287

終 章 —— 289

第1節	本書のまとめ	289
-----	--------	-----

第2節 本書の主張 293

第3節 今後の課題 296

あとがき

索引